

名古屋女子大学 和文庫本 『土佐日記 (解)』 翻刻 (2)

辻 和良

こひはなくてふなよりはしめて水のもうみのもことものともなひつになひつ、けておこせたりわかなそけふをしらせたる

白馬もみねは、七日のしるしもあらねと、彼おくり物に若菜ありて、けふをしらせたと也。正月七日に七くさのわかかなを供る事、今の京となりてのちはしめられし事とみゆ。

「七種の若菜の事、芹・菁・御形・す、しろ・薺・はこへら・仏の座といふ七種也といへとも、さる定まれる物にもあらず。枕冊子に七種の事をいひて、霜かれの耳なくさとは見るらめとあまたしあれはきくもありけりといへり。七種さたまらはかくはよむまし。た、春の始にたふるくひつみものをいろくつめるなりと覚ゆ。」

うたありその哥

あさちふの野へにしあれは水もなき池につみつる若葉なりけり

あさちふは浅茅生也。ふとは其物の生ゑる所をいふ。(24・オ)

神代紀にあはふ粟田、まめふを豆田と書、神武紀の哥に阿波赴珥破介瀾羅毘咎茂苦とあるも皆同し。ふをうの如くとなふるは音便也。池の女の哥也。此池は池にはあらねは水もなきと也。

水モナキ池ニ摘ツルトハ、浅茅生ノ野ヘナル池ノアセテソコニテ摘ツルト云カ。即、アサキ心ニ調シタル物ラナレハ、ワサトカマシクマキラスヘキ物ニモアラヌト用意シタルウタ也。大人いふ、水もなき池につみつるとは、浅茅生おふる野

へなる池のあせて、藪草しけき所につみつるといふか。即この女の浅き心して調しまゐらす物にもあらずと用意してよめる也。

いともをかしかし

今ノ本ニハ、イトモカシコシトアリ。一本ヲ採リシナリ。

このいけといふはところの名なり

上ニモコトワラレテ、池トハ処ノ名ナルコト、本ヨリ此詞ニテ明ラカナリ。然トモ、人ノ家ノ池ト名アル処ヨリト云詞ヲ味フニ、処ノ名ナル池ヲ此女ノトリテ付タル名ニモアルヘシ。サマニテハ見ストモヨキ歟。人猶思フテ因レ。(24・ウ)

よき人のをここにききてきたりてすみけるなりけり

此女の事をいへるなり。

京ノ人ナルカラヨキ人ト云。サルヨキ人ノ、土左ノ国ノ人々

イサナワレ下リテ住ルナリ。贈レル物ヨリシテ哥モ心ツカヒ

シタルハ、マコトニヨキ人ノシワサナリ。

このなかひつのはみなひとくくにはまてにくれたれはあきみちてふなこともははらつ、みをうちて

はらつ、みをうちてとは、たのしめるさまなり。莊子に赫胥氏之時民含哺而熙鼓腹而遊といへり。

うみをさへおとろかして波たてつへし

海をさへおとろかしてとは、文選海賦に於是鼓怒溢浪掲浮

更相触搏<sup>ニ</sup>、飛沫起<sup>シ</sup>、涛<sup>ヲ</sup>といへる。是らに(25・オ)よりて書るなるへし。

このあひたにことおほかりけふわりこ  
和名抄に、標子、今俗所云破子<sup>アリ</sup>是也。以餉<sup>ヲ</sup>送人<sup>ニ</sup>也と有り。  
もたせきたる人其名なとそや今おもひいてん

是は又こと人なり。其人の名なにとそやいひしをわすれたる也。

今日ハ事多カリトハ、物イハフヘキ日ニカクテオハスルヲ、  
イトホシミテコ、カシコヨリ物餉リクル也。ソレカ中ニハ、  
池ノ女ノ用意スクレタルモアリ。又、破子モタセテ来タル人  
ノコ、ロオトリセラル、モアリ。物ヲクリキタル人ノ名イカ  
テ忘ルヘキ。ソレヲ忘レタルヤウニ云ハ上手ノ筆ナリ。

このひとつたよまんとおもふこゝろありてなりけり

此人の別れをしみてのみきたるにあらず。はへ(25・ウ)あ  
る哥よみてほめられん事を求めるなるへし。

とかくいひくゝて

何くれと物かたらひ、とかく我歌にはへあらん事にいひまさる  
さま也。

己カ宿ヨリハラミテモテキタル哥ニコソ。

なみのたつなることくうれへいひてよめる歌

ゆくさきに立白波とよまんとて、其料をまついふなり。

ゆくさきにたつしら波のこゑよりもおくれてなかん我やまさらんと  
よめるいとおほこゑなるへし

いひえたりとほこりかほなる故に、大声なるへしとは(26・オ)  
いへり。

此哥吟スルトテ打ホコリタル大声ヲカク云ニハアラシ。哥詞  
ニ、立白波ノ声ヨリモ後レテ泣ン我声ノマサラント云ヲ評シ

テ、イト大声ナルヘシトハ嘲ミテイヘル詞ナラシ。ナルヘ  
シト云詞ニ心ヲツケテ見ヘシ。

もてくるものよりはうたはいかゝあらん

標子のしつらひのよきには、うたはおとれりとなり。

この歌をこれかれあはれかれとも

あはれはあゝといふ声より出て、おもしろき事にも愁ふる事に  
も何にも皆いへり。なけけといふも、長息にてあゝと息をなか  
くするをいふ。あはれは声のまゝをいひ、なけきはことわりを  
云てこゝろは同じ言也。(26・ウ)

ひとりもかへしせずしつへき人もましれ、とこれをのみいたかり

もとよりの志も哥もわるければ、ほめてのみ過して返しもせぬ  
なるへし。いたかりは、物をほむるやうにてそしる所に多くい

へり。源氏ものかたりにおほくある詞なり。

ものをのみくひて夜ふけぬこのうたぬし又まからすといひてたちぬ

又まからすとは又まからんするにて、いにて又まゐらんと也。

歌ぬし振はへて哥よまんとおもふ心にて来たり。みつから誇り  
かほにいひける歌を誰々もうはへは(27・オ)ほむるやうなれと、  
かへしすへき人も返しもせず。たゝものをのみくひてあれは、

はしたなくなりて、いにて又参らんといふを詞にて立ぬる也。  
されは哥の詞の切なるにも似す、やかてよりまたつひに来らす。

「まかると云は、あつまりたる人のちりゆく事にて退散  
の意なれば、参るとは異也。しからは、まからすはまら  
らすの誤か。されと、今の京と(27・オ)なりて後はか、  
る詞も多く、外の書にも参る・いくといふへき事をまか  
るとしるせし事かたくみゆれば、此詞は已に貫之の比  
あやまれるを其まゝにかゝれしにも有へし。」

ある人の子のわらはなるひそかにいふまろ此哥のかへしせんといふ  
おとろきていとをかしきことかなよみてんやはよみつへくははやい  
へかしといふ

よみてんやは、えよむまし、もしよまんにははやいへとなり。  
まからすとてたちぬる人をまちてよまんとて(27・ウ)もとめける  
をよふけぬとにや

或本に、夜ふけぬとにやありけん、とあり。

やかていにけり

いにけるよりやかて来らぬなり。

そもく

それとはしをおこす詞をかさねていへり。もは助辞也。もをそ  
へて云事古言に多し。

大人いふ、抑の字をあつる事、按、と、むるの義にて、

こ、にて意を興す語なり。論語に、夫子至於是邦也、必

聞其政求之興抑与之歟、といふに同じく、おさへていひ

おこす義の字なるをもてそもくとはよむなり。

いか、よんたるといふかしかりてとふ

いふかし・いふせく、同じことはにて、心もとなきさまの詞な

り。万葉集にいふせくと云に鬱悒の字を書り。詞のものは、烟

のあひて、なにとも物のわかぬ(28・オ)ことより出たるにや。

今の平言に烟のおほくたつをいふすといふもちかき詞也。

このわらはさすかにはちていはすしひてとへはいへるうた

ゆく人もとるも袖のなみた川みきはのみよりぬれまさりけれとなん

よめりかくはいふものか

童にしてかくもよむものかと驚くはかり也。かはかなの略なり。

うつくしければにやあらん

我子をうつくしむ意からにやとなり。

いとおもはすなり(28・ウ)

おもひのほかなるはと也。

わらはことにてはなにかせん

あまりをとなしき哥なれば童の言の葉といひてはよしなしと也。

おんなおきなをしつへし

をば助辞なり(与ト云に似たり)。和名抄に嫗、和名於無奈、

老女之称也とあり。されは、老女老男の哥にもしつへしといへ

るなるへし。

老女をおむなといふは和名抄によれる事也。古言にては

およなといふへし。およなはおひをみな略也。老は万

葉におよなともいへり。いとなどは通ひ、いとむとは通

ふ事なし。今の京このかたのあやまり也。

あしくもあれいかにもあれたよりあらはやらんとておかれぬめり

おかれぬめりは捨す也。(29・オ)

女フミニテ書タレハ、父ナル人ノ便アラハヤラントテ、オカ

レヌメリトハ云也。

八日さばる事ありて猶おなしところなりこよひ月は海にそ入るこれ

をみてなりひらのきみの山のはにけていれすもあらなんといふうた

なんおほゆる

古今集に、惟喬のみこの狩しけるともにまかりてやとりにかへ

りて、夜ひとよ酒をのみ物かたりをしけるに、八日の月もかく

れなんとしけるをりに、みこ酔てうちに入なんとしければよみ

侍りける、なり平の朝臣 あかなくにまたきも月のかくる、か

山のはにけて入すもあらなん

もしうみへにてよま、しかは波たちさへて入すも(29・ウ)あらな

んともよみてましや

さへてはさ、へきりてなり。

同シ八日ノ夜ナルカラ此興ヲ催セルナリ。

いまこのうたをおもひてある人のよめりける

照る月のなかる、見ればあまの河いつるみなとは海にさりけるとや

空と海とひとつにみゆれば、天の川のいつる水門は海にそと云

なり。此哥、後撰集羈旅の部に貫之とて入たり。

九日つとめて

つとめてのつとははつ時の上下をはふき、めは朝目 (30・オ)

夜めなどのめに同じき也。夜の明る時也。

大みなどよりなはのとまりをおはんとてこき出けり

和名抄、土佐国安芸郡奈半郷あり。これ也。

此追ントテモ、風ニ追ナントテノ意也。慕フニハアラシ。サ

テ、八日ヨリ天気ハヨカリシヲサハルコトノ有テ、此夙テニ

舟出スルナリ。コノ世比ノ物忌ナトスル日ナルヘシ。

これかれたかひに国のうちはとてみおくりにくる人あまたか中にふ

ちはらのときさねたちはなのすゑひらはせへのゆきまさらみたちよ

りいてたうひし日より

紀氏の御館より出たまひし日よりといふ。御は公の館なればな

り。

出雲まひしトハ女ニカハリテ書ルナレハ、紀氏ノ御館ヨリ出

タマヒシ日ヨリト云ナセルナリ。(30・ウ)

こ、かしこにおひくるへ此オヒクルハ慕ヒクルナリこの人々のふ

かき心さしは此海にもおとらざるへしこれより今はこきはなれてゆ

くこれをおくらんとてその人とおひきけるかくてこきゆく

まにくへ漕テ行ニ随ヒテノ義也。随ノ字マニくトヨム海ほ

とりにとまれる人もとほくなりぬ舟の人もみえずなりぬへし

今の本になりぬとのみ有。へしの詞落たる歟。

きしにもいふことあるへし舟にも思ふことあれとかひなし

大和物語に、車は舟のゆくを見てえいかす、舟にのりたる人は

車を見るときおもてをさし出て、こきゆけはとほくなるま、に

かほはいとちひさくなるまでみおこ (31・オ) せければ、いと

かなしかりけり云々とあるもをなしさまなり。

か、れとこの哥をひとりことしてやみぬ

カ、レト、ハ、舟ニモ思フコトアレトカイナシトハイヘト、

云コトナリト或人云リ。サル心ナルヘシ。又カ、レハノ誤也

トミレハイトヤスシ。

おもひやるこ、ろはうみをわたれともふみしなければしらすやある

らん

ワタレトモト云ヨリフミシナケレハト云ハ、文ニ踏ヲモカケ

タルモノ歟。

かくてうたふまつはらをゆきすく

猶、土左の国なり。

この松のかすいくそはくいくちとせへたりとしらすもことになみ

うちよせえたことに鶴そとひかふおもしろ (31・ウ) しと見るにた

へすしてふな人のよめる歌

もとことには木ことに也。木といふを本といふ事古語に多し。

万葉集に、銚杉かもとに蔭むすまてにと云も銚杉か本になり。

猶あり。

見わたせは松のうれことにすむつるはちよのとちとそおもふへらな

るとや

うれは上也。とちは共也。

ウレハ末ナリト云事、古言ヲ学フ人ハ僉意得タルヲ、コ、ニ上トアル、イフカシ。コハ伝写ノ誤ナルヘシ。藤のうら葉ハ藤の末葉のなやかなる也。木カクレニトハ、木ノ末カクレニテ即木末ト云ニ同シ。

うれはすゑ也といふを写したかへたるへし歟。

松も鶴も共に千代ふるてふこともて友とちとはいへり。へらはへきのきを略きて、らの言をそへつれば、へきと(32・オ)云よりゆるく、かゝる言にらの言をそへていへは、すへてゆるくなれり。かつ、へらはいと古くも聞えず。又後の物にもまれにして唯此頃のみそ専らよめりとみゆ。

大人いふ、へきといは、言のゆるひ無とて、へとのみいひ、さてらはすへて言の足はぬにらりるをそへていふ古言の例也。さるを、後の人は此言いと聞にくしとてよますなりぬ。言語は世々のうつるまゝ、にかく異なるものになりもてゆく也。又今の言葉のうたて聞にくしといむらん世も出くへし。時にしたかひてよむかよろしとも、又古きをのみうつしてよむかよろしともさためむ人あらし。さるは、おのかこのむところさまさんのみ。又このへら也をめう也となへはいかに。

この歌は所をみるにえまさらず

或人云、絶景歌ニハ形容シカタキナルヘシト。

かくあるをみつゝ、こきゆくまに／＼山もうみもみなくれ夜ふけてにしひんかしもみえずしててけのこと

てけは天気也。

かちとりのこゝろにまかせつをのこもならはぬはいともこゝろほそし

かゝる海路の様なれば也。(32・ウ)

まして女はふなそこにかしらをつきあて、ねをのみそなくかくおもへは

かくおもふにといふへきを、古きてにをはにては、かく思へといふ。其例万葉に多し。

此詞ツカヒノ事ヨク／＼勸フルニ、思フニト云ヲ古クハ思ヘハト云シニアラス。コノコト事ナカケレハ今云ハス。コ、モカクオモヘハトハ、舟ノ人々ハカク思ヘハ舟子械取ハ何トモ思ヘラヌト云ニテ、明ラカナリ。猶引カヘテナト云詞ヲ入テ見レハヨクキコユ。

大人いふ、古言なりとて今とことわりのたかふ事なし。た、此ことはひとつもていふへくもおほえず。これは、かくうき事に思へはひきかへて舟には何とも思はぬよと云にて、よく聞ゆ。古言はすへて簡約にてかゝる例あまた多し。言事長ければこゝに略す。

ふな子かちとりはふなうたうたひてなにともおもへらすそのうたふ哥は

春の野にてそねをはなくわかす、きにて手をきる／＼つんたるなを

春の野にて薄にて手を剪々、ねに泣て我(33・オ)摘たる菜也。

大人云、うなるは此つみ菜を働もてこすもとめて(33・オ)いにし也。此菜つみしは、男したる女のつみたる也。これをもていなは親や姑のほしかるへきを、あたひもやかてならはよきに、あすといひて代なしつるはかひなきわさしたりとくゆるを、音にそなくと先いひし也。ほるは欲の字義。まは、そへたる言也。

おや、まほるらんしうとめやくふらんへむさる意にて食ふ事なり

うなるか親也。まほるらんはまうほる也。食ふ事をむさほる也  
 へマウホルトハ欲覓ノ義ニテ、マウハマクナリ。マクトハ覓ル  
 ノ古言ナリ。しうとめやはうなるか舅姑なり。

かへらや

かへらんやなりへ帰ランニアラス。是ハ舟棹ノ哥ノハヤシ詞ト  
 見ユ。下ノ舟哥ニモ又アリ。

よへのうなるもかな

うなるは、万葉にうなるはなりともうなるともよみて、女わら  
 はの八ツはかりより十三四までのほど、かしらの髪を後へかき  
 下て項のほとにてはなちきりて (33・ウ) おくあひたを云より  
 出て女童の事にいへり。よへは昨夜なり。もかなは願辞也。

モカナ・モカモハ、カクアリタキトサハナルマシキコトヲシ  
 カアレカナト願フニテ、イタリテコ、ロフカキコトハナリ。

「万葉集うなる髻の字を用う。年の八とせをきる髪  
 などもよめり。和名抄云、後漢書注云、髻髪へ和名宇奈  
 為」。 (33・ウ) 俗用垂髪二字、謂之童子垂髪也。」

せにこはん

我摘たる菜をもていにし昨夜の少女の来れ、かく来たらは錢乞  
 んと也。

そらことをして

いつはりなり。

おきのりわさをして

物を買て代をやらておくを云。玉篇に貫、侍夜反除也貸也とあ  
 り。是にも当れり。 (34・オ)

除ハ懸買未償直ト云義字なれば、当れり。 (34・オ)

大人いふ、おきのりこと、て、けふそのあたひもてこす

はざる由のありてなとことわらぬそと、親しうとめにま  
 いらせて人にすかされしを音にそなくと云、くゆる言也。  
 せにももてこすおのれたに来すこれなみにおほかれとか、す

一本、これならすおほかれと、あり。いつれにても聞ゆ。

これらを人のわらふをき、てへ笑フハ興シテオカシキナリ。うみは  
 あるれとこ、ろはすこしなきぬ

波のしつかなるをなくと云也。心のしつまるにそへていふへき  
 なりへモトヨリ心スコシナクサミノコ、ロニテ。

又云、これなみとは、これかならびにといふ也。

かくゆきくらしとまりにいたりて

九日のつとめてより泊にいたりたる時までをこの一条に云り。

されは、かく云といへるに夜をかけたる事は中にこもれる也。

(34・ウ)

又云、風波の和と言も心の和さむといふもひとつこと也。

おきなひとひとり

翁人にて、貫之のみつからをさしていへり。

たうめひとり

和名抄云、日本紀曰專領二字読へ太宇女乎佐女、今按專訓へ毛

波良、專一之義也、又云太宇女者毛波良之古語也、今呼老

女為太宇女、といへり。おくに淡路のたうめもあり。

「こ、にたうめといふも、淡路のたうめのことや。ま

た貫之のめをいふ歟。源氏物かたりに伊賀のたうめなど

も見えたり。」

あるか中にこ、ちあししみしつ、ものものしたまはてひそまりぬ

こ、ろもちあしくして物もくひ給はてなり。ひそまりぬは寐た

る也。

十日けふはこのなはのとまりにとまりぬ (35・オ)

きのふこゝろさしたる奈半に泊りぬ。

十一日あかつきに舟をいたしてむろつをおふ

土佐の安芸郡なり。〈アカツキハ〉明時也。〈改正ノ本ニ―ヨ  
リ下ナシ〉

人みなまたねたれは海のありさまも見えず

いまた寐てゐるほどのなれはの意也。〈コ、ハ、独ノミ起テツレ  
くナルサマナリ〉。

た、月を見てそにしひんかしはしりけるか、るあひたにみな夜明て  
手あらひれい的事ともして

髪あけ、食事までなり。

ひるになりぬ。午時ニハアラス。日高クサシ昇リタルヲ云ナリ。

いましはねといふところにきぬ。今シノシハ助語ナリ。

をさなきわらはこの所の名をき、てはねといふところは (35・ウ)

鳥のはねのやうにやあるといふまたをさなきわらはのことなれは

童の詞なれは也。

人々わらふ時にありける女わらはなん

すなはちそのをさなき也。

このうたをよめる

まことにて名にきくところはねならばとふかことくにみやこへもか  
なとそいへる

或人云、紀氏のむすめに典侍とて哥人ありしといふ。されとい  
また詳ならず。

をどこもおんなもいかでとくみやこへもかなと思ふ心あれは (36・

オ) 此歌よしとはあらねとけにとおもひて人々わすれすこのはね  
といふところとふわらはのつみてにそまたむかしの人もひ出てい

つれの時にかわする、

土佐にて身まかりしをさなきをいふ也。

鳥ノ羽根ト云ヨリ飛カ如クニナト云ヨリ北へ行雁ノ古哥ヲ思

ヒ出テ、又幼キ人ノコトヲモ此子ノ哥ヨムニツケツ、思ヒマ

スナルヘシ。

けふはまして母のかなしからるゝことはくたりし時の人の数たらね  
はふるきうたにかすはたらてそかへるへらなるといふことをおもひ  
て、

古今集、よみ人しらす 北へゆく雁そなくなるつれてこしかす  
はたらてそかへるへらなる

人のよめる (36・ウ)

よのなかにおもひやれとも。此哥の下句左に出つ。改正の本にては  
つ、けてか、れたり。

世の中にさまゝの事をおもひはかりて見るになり。世の中に

ノにノ言ハ世の中のならひにと云を略キタルト思ユ。おもひ

やると云詞は本はこゝろをやるといふに同じく、我胸の中にむ

すほふれたるおもひを放すつるに思のはるゝと云さまの詞也。

さるを今の都となりてよりこれのみならずやうゝ言語の本乱

うつりてあやまれるも少からず。おもひやるもおしはかりおも

ひはかる事に専らあやまり用う。万葉集其ほかの古書にはさも

ちるし事なし。されと此歌には後の誤のまゝに用ゐられたれは、

それかま、(37・オ)にてとくへくなん。妙寿本には、おもひ

あれともとあり。

世の中のならひにトにノ言ヲ意得る時ハ、此おもひヤレトモ

ハ古言ノ義ニテヨクカナヒヌヘシ。上ニアリシ思ヒヤル心ハ

海ヲワタレトモト云ハ、思ヒハカルト見ルヘシ。又、一本ノ

思ヒハアレトニテハ世ノ中ニノニハ習ノニト見ルヘカラス。

「古今集の光行の雁そ鳴なるの哥の左の注によりて所とせる注もあれと、古今の左の注は皆後人の書添し物にて撰者の筆にあらぬ事は、已に我加茂の具ぬし古今の注に其論あり。(37・オ)」

子をこふるおもひに増る思ひなきかなといひつ、なん

といひつ、旅行なりへ或説には、といひつ、なんとは恋悲シメルヲ含メタルナリトイヘリ。

十二日雨ふらす

降へき空のけしきにてふらさりし故にかくはかきつらん。

文時維茂か舟のおくれたりし

こは類船の人々なるへし。されともしれかたし。(37・ウ)

或説に貫之の子に時文とて、梨壺五人の中の人あり。これか文字顛倒(37・ウ)せしにやといへり。

ならし津よりむろ津につきぬ

土佐の国安芸郡奈良志、同郡室津。

十三日のあかつきにいさ、かに雨ふるしはしありてやみぬ

きのふ降へくてふらさりしか、けふそしはしふりけるなり。

をとこをんなこれかれゆあみなとせんとてあたりのよろしき所においてゆく

舟より陸において也。室津のあたり浦にして人の家あり。湯あ

みならずへき所とみゆ。

大人いふ、よろしき所は湯あみの便よき也。国の守なれ

は此浦の長なとか家に案内せさせつへし。

海をみやれば(38・オ)

雲もみな波とそみゆるあまもかないつれかうみととふているへくと

なんよめる

雲も皆浪トツ是ユルト句ヲ切テサテ蟹モカナ来ヨカシトコ、ロウヘシ。

さてとをかあまりなれば月おもしろしふねにのりはしめし日よりふねにはくれなぬこくよき、ぬきすそれは海の神におちてといひて

紅は濃とは濃紫・濃蘇芳の類也。国府を立しより今までは船にのみ在しか、こゝにしてはしめて陸に下たち湯あみせんとして陸におり立、人の家にゆくに、衣のあしきを思てそれをはるやうにていひつ、行。寔に女の心さるへき事になん。いひ(38・ウ)てと云詞はおりにてゆくと云へ立返りて思ふへきなり。

なにのあしかげにことつけて

或説に、何やうの御陰にやらんとてと云意なるを、海辺なれば芦陰にとつ、けたるか。陰は君か御かけにます陰はなしと云に同じ。ことつけはかこつけてと云ほとこの事なり。

ほやのつまのいすし

老海鼠の端の飯鮎也。延喜式に若狭の国の調貢に、保夜交鮎とありへ端ヲつまと云ハ聞ヘタリ。交ヲツマトヨムハアツメ鮎ノ義ニテ書タルカ、義詳ナラス。

「或曰、老海鼠、和名抄ニ保夜トアリ。一名、海男子、

なまこの事なり。貽貝、和名抄ニ伊加比トアリ。一名東

海夫人、女陰ニ似タル貝也。ほやの妻の貽と劇(39・オ)

レテ云タルカト也。」

すしあはひをそ(39・オ)

鮎鮎なり。所の海人ともかこれめせとや。

こゝろにもあらぬはきにあけて見せける

こゝろにもあらぬはきにあけては、あまどもの脛までか、けあ



けたる也。わざとにはあけねと波にも入故に脛にもあくへし。又もとよりみしかきを着たるにもあるへし。今案、かく詞を足しこゝろをそへてみる時は一わたり聞ゆるさまなれと、此文のさまかゝるすかたならねは、こゝのみかく書へきにあらす。とにかくに此一条は詞も落、文字のたかひもあらんと覚ゆる也。十四日あかつきより雨ふれはおなし所にとまれりふな(39・ウ)きみせちみす

貫之ぬしをいへるなるへし。せちみ、或本に節忌とあり。精進の事なり。仏書に十四日齋日也。ことに正月五月九月は年三とて、持戒精進して一切の罪を消滅するよし也。二月八日にもせちみすること次に見えたり。

蜻蛉日記はつせ詣の所に、としみなといへと我はしやうしなりといへるは、う(39・ウ)まれし日をとしみといふとみゆ。源氏をとめに、式部卿の宮の御賀のことを御としみと云しに合せて知るへし。然れば、としみとせちみは別なり。

さうしものなければうま時よりのちにかちとりきのふつりたりしたひにせになければよねをとりかけておちられぬ

米ととりかへ買ふ也 へ錢無レハ例ノ劇言ナリ 船中精進物なけれは、朝はかりにて落られぬと也。(40・オ)

かゝる事、猶ありぬ。へ或本、おほくありぬ。かちとりまたたひもてきたりよねさけなとくるかちとりけしきあしからす

くるとは、米酒くれたるなり。

十五日けふあつきかゆにす  
拾芥抄云、世風記云正月十五日亥時煮小豆粥、為天狗祭  
庭中案上、則其粥凝時、向東方再拜長跪服之、終年

無疫氣。公事根源云、寛平の頃より年毎に是を奉るとあり。くちをしく猶日のあしければるさるほどにそけふはつかあまりへぬる(40・ウ)

源氏物語に、いさり出たまふとあるに同し。

猶日和ノアシケレハ磯ツタヒシテ行ヲ、寔ニ并サリアルクホトニノミト云也。朽ヲシクハ天氣ノアシキカコ、ロニマカセヌナリ。国府ヲ立シヨリハヤク廿日余ヲ歴ヌルカ、猶土左ノ国ヲハナレヌカ朽ヲシクカヒナキトナリ。  
いたつらに日をおくれは人々海をななめつゝそある  
一本、日をおくれは。

めのわらはのいへる

たてはたつぬれはまたあるふく風と波とは思ふとちにやあるらんいふかひなきもの、いへるにはいにつかはし

十六日風なみやまねは猶をなし所にとまれりたゝうみの波なくしていつしかみさきといふ所わたらん(41・オ)とのみおもふ

安芸郡室津の御崎也。

風波とに、やむへくもあらず

とに、或本ともにと有。とに、はとみにと同し。言通えり。

とみは、速也。

フトモとみヲとにトハ聞知ヌ詞也。とミにと書シヲと二にト写タカヘシナラン。ミトニト一画ヲ落セシカ。

大人いふ、とに、は頓の字音もていふなるへし。  
ある人のこの波たつを見てよめる哥

波の立を、とあるへし。のを脱せしか。

霜たにもおかぬかたそといふなれと波のなかには雪そふりける

白氏文集云、誰言南国無霜雪、尽在愁人鬢(41・ウ)

髪<sup>ノ</sup>間<sup>ニ</sup>云々、此詩に因て波を雪に見なしてよめる也。

さて舟にのりし日よりけふまでにはつかあまりいつかになりけり  
十七日曇れる雲なくなりてあかつきつくよひともおもしろければふ  
ねを出してこきゆく

アカツキ月夜、時明月夜<sup>⑧</sup>ニテ已ニ明チカキ夜ノ月影ナリ。

このあひたに雲のうへも海のそこもおなしことくになんありけるう  
へもむかしのをのこはさをはうかつ波の上の月を舟はおそふ海のう  
ちのそらをとひけん

むかしをのこは、唐国の賈島といふ人を云。詩人玉屑と云書に、高

麗使過<sup>レ</sup>海有<sup>レ</sup>詩云、水鳥浮<sup>テ</sup>還<sup>マ</sup>没<sup>ス</sup>、山(42・オ)雲断<sup>テ</sup>復<sup>テ</sup>連<sup>ナル</sup>、

賈島詐<sup>テ</sup>為<sup>レ</sup>梢人<sup>ト</sup>、聯下句云、棹<sup>ハ</sup>穿<sup>ハ</sup>波底月、船<sup>ハ</sup>厭<sup>フ</sup>水中天、

麗使喜歎久<sup>ク</sup>之、自此復<sup>テ</sup>不言<sup>フ</sup>詩といへり。

き、されにける

聞去、聞流しに聞てそらにはよくもおほえすといふなるべし。

聞去しのらしの約めりなるを、れに通はせたりへカク云テ聞ナ

レニケルノ義ナルヘシ。暗ニハオホエスマテニハ及フマシ。サ

トナト通ス。

またある人のよめる

みなその月のうへよりこくふねのさをにさはるはかつらなるへし  
これをき、てある人またよめる

かけみれば波のそこなるひさかたのそらこきわたる我そ(42・ウ)

わひしきかくいふあいたに夜やうやくあけゆくにかちとりらくろき

雲にはかにいてきぬ風ふきぬへしみ舟かへしてんといひてふねかへ

る此あひた雨ふりぬいとわひし

又室津へ舟かへせしなり。

十八日なほおなし所にあり海あらければ舟出さすこのとまり遠く見

れともちかくみれともいとおもしろしか、れともくるしければ何こ  
ともおほえすをとこともはこ、ろやりにやあらんから歌なといふ  
へしふねもいたさていたつらなれはある人のよめる

心やりはおもひやると云に同じく、胸にあつまる(43・オ)思

ひをやりうしなふ也。既にもいへるか如し。大和物語に、片岡

にわらひもえすは尋つ、心やりにやわかなつま、しといへるも

同じこ、ろ也。

いそふりのよする磯にはへ此哥改正の本には腰句已下つ、けて書り

相模国風土記、鎌倉郡見越崎每<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>速<sup>キ</sup>浪崩<sup>レ</sup>石<sup>ヲ</sup>、海人号<sup>ニ</sup>伊

曾不利<sup>ト</sup>云々。万葉集十四、鎌倉の見こしか崎の岩くえの君か

くゆへき心はもたし、同二十、大君のみことかしこみ磯にふり

海原わたる父母をおきて。然は、波の磯にふる、をもて、やか

て磯ふりといひて波のこと、する也へ此頃の方言などにや。

大人いふ、嵐の庭の雪ならて、といふたくひなり。はや

く此頃より、かゝる詞つかひもありしなり。

としつきをいつともわかぬ雪のみそふるこの哥はつね(43・ウ)に

せぬ人のことなり

常には哥よまぬ人の詞也へ等云カ、即ホムルナルヘシ。

また人のよめる

風による浪のいそにはうくひすも春もえしらぬ花のみそさく此うた  
ともをすこしよろしとき、てふねのをさしけるおきな月ころくるし  
き心やりによめる

舟の長也。船中の事つかさとる人なり。貫之ぬしを云へし。月

ころ苦しきはあるか中にこ、ちあしみしてとある首尾をいへり。

たつ波を雪か花かとふく風そよせつ、人をはかる(44・オ)へらな

るへ吹風そのそはにの字誤なるへし。そといふもにその意と聞ゆれ

はにをはふきかたし。されは結句もへら也と有しをなると改しならん。

はかるはたはかると云也。人を欺くをいへり。はしめの二首は波を雪よみ花と見たてなせるを引あはせてこ、にはよめる也。

「たはかると云語はもとは手もて物の寸をはか(44・オ)りしるより出たる詞なり。たをはふきても只はかると云も同じ。それをはかるといへは、物を欺くこと、のみおもへるはあし、。所によりて、たはかる事も欺くこと、なる也」

たはかるは量の事より出て、欺くは末也。

このうたともを人のなにかといふをある人き、ふけりてよめるふけりは、深きより出たる詞なり。夜のふける楽しみに耽ると云。こ、も其哥ともをほむるを聞て、我もふかくおもひ入てよめるといふにや。

フケルト云詞コ、ニテハ耽の字ノ義ニテ、耽ハ過ト云ニ同シク事過タルナリ。凡テ我意得又事ヲ思ヒハカレハ、必過ルコトアリ。

大人いふ、こ、のふけるは耽の字義にて、ふかく入過たる也。さて、文字の数さへとなへかたきまでよみ出たるなれは聞ふけりてといふか、心得過たるといふ刺言ツツと聞ゆ。今の世にもかしこきに過たる、よきに過たるなどはそしりことにいへり。

その哥よめるも文字しみ文字もしあまりな、もし人みな(44・ウ)えあらへエ堪アラテナリ、わらふやうなり哥ぬしいとこ、ろあしくてえす

えずとは心得す腹たちする也。

大人いふ、文字あまりし歌二条院讀岐、わたつうみの沖つ汐あひにかつく蟹の息もつきあへす物をこそおもへ、此哥三十六字あれとなへくるしくもあらぬなり。是を

ある教の語に是は五十連音の豎横のかよひの法則にかなへは聞よくとなへくるしからすといへり。是はた、自然の連声のついてよろしきにて、豎横の相通の法をもてよみたるものにあらず。連声よろしきか即よみ人の上手なれば也。又未來記に出されし、わすれぬらんうらめしとおもひ思ふとても侍へきにあらずとはんともいはしといふ哥も三十六字ありて、是は聞よからず。よむましき例に出されたり。私に思ふ、此未來記の哥は(45・オ)哥ともおほえぬひか言よみにて、しめさすとも誰かはまねはん。これは、わざとにかくつたなけにつくりなしていましめの例に作り出たるにやとも覚ゆる也。凡哥よむといふ人のかゝるつ、けからよみ出んやは。若、これをは哥の詞めかしくせは、わするらんうらめしと思ひおもふともまちは待しとはんともせしなど、おほよそ人はかくさまにこそよむへけれ。かゝるひか言をとう出て、教へのためしとせん事無益也。こ、の文にも未來記の歌の類なるへければ、しるしもと、められぬそかしこかる。すへてをしへたち物いふ人はあた言の多きそかし。

まねへともえまねはすかけりともえよみすゑかたかるへしけふたにかくいひかたしましてのちにはいかならん

或本によりみあへかたかるへし。

十九日日あしければ舟いたさす

二十日きのふのやうなればふねいたさす皆人々うれへなけくくるし

く、ろもとなければた、日のへぬるかすをけふいくかはつかみそ  
かとかそふれはおよひもそこなはれぬへし(45・オ)

和名抄に指(和名由比俗云於与比)といへる。源氏もの語に、  
およひをか、めてとをはたみそよそなど、かそふれはと有。も  
こなはれぬは日数の久しきほとを文の巧みにいへり(あまりに  
かそへくすれは指のそこなはる、といふ。是はいかひ也。そこ  
なふは傷の字なり)。

いとわひしいもねす

いもねす、もは助辞也。いねすといふに同じく、いは宿の意、  
ねはなえの約なり。なえふすともぬえふすとも云て、足をなよ、  
かに伸して臥なり。其詞約りていぬると言なり。

又云、いは即寐也。あさねを(45・ウ)朝は寐むたきを  
いたきなき夢をいめと言にしらる。宿をいといふは、宿  
直をとのいといふよりいはれたれと、宿即寐也。よつて  
いともよむ也。

はつかの月いてにけり山のはもなくて海の中よりそ出くるかやうな  
るをみてやむかし安倍のなまると(45・ウ)いひける人はもろこ  
しにわたりてかへりきたる時にふねにのるへき所にてかのくにひと  
うまのはなむけしわかれをしみてかしこのから歌つくりなとしける  
あかすやありけんはつかの夜の月いつるまでそありけるその月は海  
よりそ出けるこれを見てそ仲まろのぬし我くにはかゝる歌をなん神  
代よりかみもよみたひ今はかみなかしの人もかやうにわかれを、  
しみよろこひもありかなしみもあるときにはよむとてよめりけるう  
たあをうなはらふりさけみれはかすかなるみかさの山にいてし月か  
もとそよめりける

天の原、青海原とふたつにいひ伝へしなるへし。海上(46・オ)

なれは今は青海原をとられしとみゆ。古今集には、天の原と有。  
ふりさけのふりは辞。さけは見さけ聞さけなど、同じく、遠放  
る心也。はるかに見る事なり。

かのくに人き、しるましようおもほえたれともことのこゝろを、とこ  
もしに

此頃事言に、草の書をいとなたらかに書たるを女文字といひ、  
かたくなに書たるを男文字といひしなるへし。

さまをかきいたして

漢文にて書て見せしなり。(46・ウ)

こゝのことはつたへたる人に

他国の言語をまなひて其国の言にかよはするを、もろこしにて  
象胥の学といひていにしへより其業あり。

いひしらせければこゝろをやき、えたりけんいとおもひのほかにな  
んめてけるもろこしとこの国とは言葉ことなるものなれと月の影は  
おなしことなるへければ人の心もおなしことにやあらんさて今その  
かみをおもひやりてある人のよめるうた

みやこにて山のはに見し月なれとなみよりいて、波にこそいれ(47  
・オ)

或注云、此歌仲丸ノ意ヲウケテ所ニツキテヨメル也ト。安倍  
仲麻呂ノ事父祖未詳。元正天皇靈龜二年八月二命アリテ遣唐  
使多治比呂守、大使阿倍安麻呂、副使藤原馬養、大判官一人  
少判官二人録事二人少録事二人ヲ遣ハサル、ナリ。仲丸ノ名  
見エネ共此度留學生ナトニテ相従ハシムルナラント加茂翁ノ  
云レタリ。若ハ大使ノ安丸ノ親屬ナトニテ弱冠ノ時ニヤ従テ  
渡ラレケン。旧唐書東夷伝ニ云開元初、又遣使來朝、因  
請儒生授經云々、就鴻臚寺、教之乃遣玄默濶幅布為東

修之礼、題云白亀元年調布云々、其偏使朝臣仲滿慕<sub>二</sub>中国之風<sub>一</sub>、因留<sub>リテ</sub>不去云々。偏使ト見ユレトモ留学(47・ウ)生ナルヘシ。使ト云ホトノ人私ニ留マル事アタハス。又云留京師五十年云々。又云、上元中擢<sub>テ</sub>衡<sub>ヲ</sub>為左散騎常侍鎮南都護云々。是仲滿ハ仲丸ナリ。後ニ朝衡ト改名セシナルヘシ。但、朝ヲ以テ氏トスルカ。安倍氏ノ姓ハ朝臣ナレハナリ。サテ白亀ハ靈龜ノ訛ニテソアラメ。二年ノ使ナレハ元年ノ調布ヲ以テ束修トスヘキ事ナリ。此二年ヨリ上元ノ始マテ凡四十余年カホトナリ。因テ五十年ト書ルモ合ヘリ。然日本ヘ皈ラントシテ明州ノ津ニ出テ<sub>一</sub>舟ニ乗レル時、王維包結ナト云文人等ノ送別ヲ寄シモ見エタリ。王維、積水不可<sub>レ</sub>極、安知滄海東、九州何処遠、万里若<sub>レ</sub>乘<sub>レ</sub>空、向<sub>レ</sub>国惟看日、帰帆但信<sub>レ</sub>風、鰲身映天黒、魚眼射浪紅、郷(48・オ)国扶桑外、主人孤島中、別離方異域、音信若<sub>レ</sub>為通。コレハ王維カ詩ニテ送秘書晁監歸<sub>二</sub>日本<sub>一</sub>ト詞ニ見エタリ。又、包結カ贈レル詩、上才生<sub>二</sub>下国<sub>一</sub>、東海是西隣、九詠蕃君使、千年聖主臣、野情偏得<sub>レ</sub>礼、木性本含<sub>レ</sub>真、錦帆乘<sub>レ</sub>風転、金装照<sub>レ</sub>地新、孤城開<sub>二</sub>層閣<sub>一</sub>、曉日上車輪、早承来朝歳、塗山玉帛均。カクテ舟出セシカト風波アシキニ遇テ又彼土ヘ吹カヘサレ、其後安録山ノ乱ニ遇ヒ年ヲワタリテ後又仕ヘテ官位昇進シ、終ニ彼土ニテ身マカラレシナリ。一度帰朝ヲセントセシハ天平勝宝四年ノ遣唐使ノ皈ルニ從ヒテノコトト思ユ。此度ノ大使藤原清河卿モ共ニ吹返サレテ終ニ彼土ニ終ラレシナリ。又此明州送別ノ時仲丸ノ(48・ウ)詩、御命將<sub>レ</sub>辞<sub>レ</sub>国、非才忝<sub>二</sub>侍臣<sub>一</sub>、平生一宝劍、留贈<sub>二</sub>結交人<sub>一</sub>ト云モ或書ニ見エタリ。サテ風波ニ遇テ溺死セラレシ由彼土ニハ聞エシニヤ。李白カ哭<sub>二</sub>晁臣卿衡<sub>一</sub>ト云詩アリ。

日本晁卿辞<sub>二</sub>帝都<sub>一</sub>、征帆一片繞<sub>二</sub>蓬壺<sub>一</sub>、明月不<sub>レ</sub>帰沈<sub>二</sub>碧海<sub>一</sub>、白雲秋色滿<sub>二</sub>蒼梧<sub>一</sub>。又続日本紀宝龜十年五月、前学生阿倍朝臣仲麻呂有唐而亡、家口褊乏葬礼有<sub>レ</sub>闕、勅賜東絶一百疋白綿三百屯。其後続日本後紀云承和三年五月、便附唐使、贈遣往歲衙本朝命入唐使並留学等在<sub>レ</sub>彼身没者八人位記、以慰<sub>二</sub>幽鬼<sub>一</sub>、其詔曰云々、故留学問贈從<sub>二</sub>二位安倍朝臣仲滿、大唐光録大夫左散騎常侍兼御史中丞北海(49・オ)郡国開国公潞州大都督朝衡、可<sub>二</sub>贈正一品<sub>一</sub>、身涉鯨波業成<sub>二</sub>麟角<sub>一</sub>、詞峯聳峻学海揚漪、頭位斯昇英声已播、如何不<sub>レ</sub>愁莫<sub>二</sub>遂言歸<sub>一</sub>唯撻天之章長伝<sub>二</sub>擲地之響<sub>一</sub>云々。仲丸ノ事ハ此紀ノ注ニ用ナケレハ師ハ除カレシヲ、今又コ、二書アラハセルハ事ノ次序ニテノミ。(49・ウ)

〔補注〕

そのかみは当時当今、或は昔時往日などいふ字をあて、むかしのその時といふこゝろにいへり。(47・オ)(続く)

- (1) 「つる」を見せ消ち、右傍に「つる」。(汚損)
  - (2) 「け」を見せ消ち、右傍に「き」。
  - (3) 「と」と「る」との間、右傍に「ま」。
  - (4) 「雲」を見せ消ち、右傍に「た」。
  - (5) 「い」を見せ消ち、右傍に「い」。(汚損)
  - (6) 「是」を見せ消ち、右傍に「見」。
  - (7) 「年」を見せ消ち、右傍に「年」。(汚損)
  - (8) 「時明」を見せ消ち、右傍に「明時」。
  - (9) 「る」を見せ消ち、右傍に「り」。
- (付記) 資料の閲覧、及び翻刻の許可を下さった本学図書館に感謝致します。猶、本稿は名古屋女子大学教育研究所、平成四年度的一般研究助成の成果の一部である。